

## 「対話型模擬授業検討会」を通じた他教職大学院との交流

去る11月30日、宇都宮大学教職大学院において自主ゼミ企画(「省察を深める対話型模擬授業検討会を体験しよう」)を開催しました。同企画には東京学芸大学教職大学院生3名が参加し、彼らが教職大学院での講義や演習の中で行っている「対話型模擬授業検討会」を実演してくれました。

子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、これまで以上に授業や校内研修を充実させることが求められています。そのような中、「対話型模擬授業検討会(以下、対話型検討会)」が注目されています。宇都宮大学(以下宇大)教職大学院では、今夏、対話型検討会の第一人者である渡辺貴裕先生(東京学芸大学)をお招きし、講演会を開催しました(通信第35号参照)。

その縁もあり、今回、東京学芸大学教職大学院生が宇大で対話型検討会の実演をしてくれました。授業者は宇大教職大学院2年(学卒)のT君。中学社会地理分野「北アメリカ州」の導入で子どもたち自身が単元を通じた疑問を出すことをねらいとする授業を行いました。T君は、アメリカの有名企業のロゴを印刷した資料、その企業の本社の所在地を記した地図を生徒役の院生(東京学芸大学と宇大教職大学院生の混合チーム)に配布し、気づいたことを話し合いました。

模擬授業後、授業者と生徒(役)の Do、Think、Feel、Want について授業者も交えて対話の中で検討し、それぞれのズレを明らかにしていきました(写真)。ズレを認識することで自分は何を教えようとしていたのか、生徒の思考を深めるためには何が必要であったのかについて、授業者がさらに省察を深め、授業改善の契機とします。



～検討会の様子～円陣右から2人目が授業者のT君

授業者のT君は、「生徒の気持ち」が聞けることで「あのときの指示は少し意味が分からない。」「あのときは、先生が声をかけずにもっと自分たちで活動させてほしかった。」など、普段なら生徒が言わないようなことを率直に伝えてくれるよさを感じたようです。また教材の解釈や指導法ではなく「ズレ」を見つけることが目的となり、お互いに授業を客観的に分析でき、「より良い授業をつくっている」という安心感が授業者としてあったようです。

その他、院生からは、写真にあるように対話型検討会は独特なまとめ方をするので習熟が必要であるといった意見もありました。他方で、図示することでさらに検討や省察が深まる可能性があるという感想がありました。また、子どもの立場に立って素直な感想を述べていくうちに、授業の中での課題や良いところに気が付くことができ、「こうすればよかった」という授業への指摘をしないことで授業者が批判されているような気にならず、いい方法ではないかという指摘がありました。さらに授業者の意図に対して参加者(生徒役)はこう思っていた、ではどうしたら…?と、その場で授業者が授業を振り返ったり問いを持ったりすることが通常の授業検討会に比べて多いのではないかという意見も寄せられました。

次に出張してくれた東京学芸大学教職大学院のN君の感想です。「対話型検討会はハードルの高い難しいものではないということです。それは『理論に則ってまとまったことを言わなくて良い』、『その場で感じたこと、思ったことを率直に言い合う』、そして、そこから出てきた発言をつむぎ合わせて新たな発見をするという『対話』がベースにあるからだと改めて気付かされました。」このように改めて対話型検討会のよさを認識されたようです。

この他、他大学の院生との交流はとても刺激があった、改めて宇大教職大学院生の頼もしさがわかったという感想もありました。

最後にこの企画に賛同いただいた渡辺貴裕先生をはじめ、東京学芸大学の先生方に感謝を申し上げます。宇大教職大学院では、これからも子どもの姿からの授業・学校改善の試みや実践を通して様々な大学や学校と交流を図り、その成果を多くの学校に発信していきたいと思っております。(文責:小野瀬善行)

## 「学びに向かう力と認知的スピードバンプ」 教育実践高度化専攻教授 久保田善彦

「学びに向かう力、人間性等」は、「主体的に学習に取り組む態度」だけではなく、「自己の感情や行動を統制する能力(自己統制能力)」や「自らの思考等を客観的に捉える力(メタ認知)」などが含まれます。例えば、「自己の感情や行動を抑制する能力」とは、単に感情を高めるだけではなく、高すぎる感情を抑えるなどコントロールが必要な能力です。コントロールする前には、自己の状況を把握する「メタ認知」の力も必要な能力でしょう。これらの能力は、小学校や中学校の教科学習では、あまり注目されませんでした。しかし、生涯にわたって学んでいくために不可欠な能力の一つです。

成すべきことが明確であればあるほど、学習者は目的の達成に向け、猛スピードで突き進むことがあります。一見、望ましい光景のように見えます。しかし、猛スピードであるが故に、視野が狭くなり、目的を見誤ることも多々あります。自分は何のために活動を行っているのか、何を確認すれば良いのかなど、振り返る余裕がないのです。適切に振り返るには、活動のスピードを緩めたり、立ち止まったりすることも必要でしょう。車のスピードを落とさせるためのかまぼこ形の隆起を、スピードバンプと言います。教室では、車のスピードでなく、思考のスピードを落とすことも必要になります。思考のスピードを調整し、広い視野で振り返るための手立てが、“認知的スピードバンプ”です。

教師は、認知的スピードバンプとなる手立てを学習活動の中に組織することで、子ども達の「自己の感情や行動を統制する能力(自己統制能力)」や「自らの思考等を客観的に捉える力(メタ認知)」の支援が可能になるのかもしれない。

### 《シリーズ:院生の声 ⑧》

#### 「授業という世界」

#### 子どもの「想い」に触れる

子どもの数だけ 授業がある  
子どもの数だけ 教材の観え方がある  
子どもの数だけ 世界がある

でも そのほとんどは 観えなくて  
毎日 私は 目を凝らす  
その目に映る 素敵な学び  
あの子だけの あの子らしい学び  
夜空を見上げ 銀河を感じ  
一つの星の 一つの光を 観つめるように

でも やっぱり まわりには観えない無数の星々  
そんな授業の 壮大で多義的な世界に  
怖さを感じ 目をそらしたこともある

ただ 今は 感じる  
そんな掴みようもない世界に 身を委ねる喜び

授業の「ゆたかさ」に  
子どもの学びの「ゆたかさ」に  
日々 出会い ともに生きる

「授業という世界」を生きる幸せ

教職大学院の先生方に学び、実習校である上三川町立明治南小学校で、先生方、子どもたちから学び、たくさんの学校参観で、たくさんの先生方と子どもたちと出会った。大切な仲間と過ごした。そんな僕の教職大学院での2年間の学びを表すのに最適な詩だと思った。

毎日、たくさんの先生方と子どもたちに出会えることが、うれしかった。教師になってよかったと思える毎日。明日は、どんな授業に、どんな先生に、どんな子どもたちに出会えるか。毎日、新しい世界が待っている。

(2年 大関健一)

授業参観をさせていただくときに、ふと「〇〇くんはなぜあのような発言をしたのか」「〇〇さんのあの行動にはどのような意味があるのか」と考えるときがある。今までの私であれば気に留めないうちの場面で、ふと立ち止まって考えるきっかけをつくってくれたのが、教職大学院で学んだ「ビデオリフレクション」である。そのときの児童の本当の想いは理解できないが、多くの先生方と語り合いながら児童の「想い」に触れ、価値づけてあげることで児童の多様な側面が見えてくる。

実習校で実習をさせていただく中で、子どもたちの姿を先生方と共有できる時間が何よりも楽しい一時である。子どもたちの多様な側面を知ることができるとともに、自分自身の視野を広げられるからである。

来年から自分が教壇に立って授業をする中で、ふと立ち止まって子どもの「想い」に触れる余裕があるだろうか。もしかしたら授業をすることで精一杯になってしまうかもしれない。しかし、立ち止まることを恐れず、子どもに寄り添える教師を目指して一歩ずつ邁進していきたい。



(2年 土山桃佳)

【編集・発行】宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242

<http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook : <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。

